

と詳細に写真を解説したい人のために、“写真プリントの入手”が補足されている。

本書に採録されている写真は火星研究者にとっては貴重な資料である。それらは惑星地形学者のみならず、地質学専攻者にも目をとってもらいたいものばかりである。専門家でなくても天文に興味ある人ならば、天体写真集の別冊としてこの本を各自の図書に加えてもらいたい。内容の素晴らしさのみならず、フィーリングのよい本である。

(赤羽徳英)

天文学 ——第二版—— 萩原雄祐・著
(岩波全書, 昭和52年, 295頁, 1,300円)

本書の第一版が書かれたのは約20年前であるから、まだパルサーもクェーサーも発見されてはいなかった。ここ20年における天文学的知識の増大は革命的ともいえるものがある。旧来の可視光に加えて、電波・赤外・X線・ γ 線等で新発見が続々となされ、いまや未開拓の波長領域はほとんどないと言ってよからう。これからも観測技術の進歩に伴って新発見は次々となされるであろうが、少くとも観測手段という観点からみると、開拓時代は終わったという感がある。このような状況で本書の改訂が行われたことは、まことに時機を得ているといえるだろう。

本書は、大学での課程用教科書として書かれており、内容はかなり高度である。専門用語や数式も多く、初学者には少々難解と思われる点もあるが、現在の天文学の状況を知るには打って付けの書である。天文学の各分野が最近の研究も含めて紹介されており、観測的な側面はもちろん、古典力学から相対性理論まで理論的アプローチの多様な側面もみることができる。これから天文学を学ぼうとする人は、本書によって天文学の一般常識を身につけると共に、自分の好みにあった分野を見いだすことができるだろう。

天文学も最近はかなり細分化がすすみ、ともすると重箱の隅をつつくような事態になりかねない。研究者は、広い視野を持ち、常に、自らの研究と学問全般との平衡を保つよう心がけることが大切であろう。おりあるごとに天文学全般を見なおして、自らの研究の位置づけと方向づけを再確認することが必要である。本書はそのような目的にも適当と思われる。研究にお忙しい先生方も、しばしその手を休めて本書を一読されてはいかがだろうか。

(井上 一)

日本書紀暦日原典 内田正男著

(雄山閣, 1978年, A4判, 393頁, 8,800円)

1975年に大著『日本暦日原典』を刊行された著者が、ここに再びこの書を公表された。さきの書物では、中国で元嘉暦が施行された455年(允恭天皇34年)以後の

暦日を取扱い、それ以前は欠略していた。新著では神武天皇元年(660 B.C.)より持続天皇11年(文武天皇元年, 697)まで、『日本書紀』の時代の暦日が取扱われており、さきの著書とあわせて、神武元年より明治5年に至る2500余年の暦日が明確にされた。これで内田氏のこの方面の仕事は一段落を告げたわけで、永年の労苦に感謝したい。周知のように、神武紀元は後世より作られたもので、神武紀元以降数百年の暦日は後世より逆算されたものである。それが如何なる暦法で逆算されたかは年代学上の大問題であるにもかかわらず、これまで定説がなかった。ところが先年、故小川清彦氏が唐の麟德暦、すなわち日本でいう儀鳳暦を用い、しかも計算の便宜上、定期でなしに簡単な平朔を用いて逆算したことを明かにされた。これはすばらしい卓見であり、私自身も講演や小論文の中でこれを紹介してきた。小川氏の説を少しく拡張すると、安康天皇の時代から、日本で実際に中国暦——元嘉暦が使われはじめたと解釈され、この時代は日本での中国文化輸入における1つの画期であったと結論できる。小川氏の論文によってこうした結論を述べたところ、考古学者の梅原末治氏が考古学上の遺物からも同じ結論がでると賛同されたことを記憶している。内田氏の新著もこの小川氏の説によっているが、きわめて妥当な処置であると思う。小川氏は傍系の出身であったため、東京天文台では不遇であったが、なかなか優秀であったと聞いている。この論文も発表されないままに終り、僅かに今井 溱氏がガリ版で刷り小範囲に配布された。私自身もこのガリ版を利用した。内田氏の新著にはこの論文が附録されており、はじめて多くの人々に小川氏の業績が世に紹介されることになった。先人を顕彰する内田氏の厚意に感謝したい。古代史ブームの折から、小川氏の論文、それに内田氏の新著は日本歴史の研究者に大きな反響を呼ぶことであろう。(藪内 清)

新刊紹介

自然科学は実験(観測・観察)と理論(解釈・仮説)との融合により発展し、それがくずれるといびつなものとなっていく。次に紹介する二書は、両者それぞれの側に力点を於いて天文学の発展を論じたものであり、一般的な天文解説書とは一味違ったものになっている。

『宇宙の発見』アシモフ著 斉田博訳

(地人書館, 昭和52年9月30日発行, 316ページ, 2,500円)

著者は広い分野にわたる啓蒙書等でおなじみである。本書も彼一流の平易な表現と、訳の流暢さで読む者に抵抗を感じさせない。内容は彼の多くの天文関係の著者から、天体観測装置の歴史に力点を置いて再編成したもののようなものである。望遠鏡発見以前の天文学から、光学望遠